

「北塞記畧」訳注 (二)

The annotated translation of Buk-Say-Gi-Lyak (II)

訳者 宮下尚子 (MIYASHITA Naoko)

孔州風土記 (続)

(八)

【正文】面謂之社。民謂之鄉徒。鄉族謂之品官。自南河徙者謂之人居。巫覡謂之師。里中公事謂之風俗。私奴謂之土奴。

【和訓】面は之を社と謂ふ。民は之を郷徒と謂ふ。郷族は之を品官と謂ふ。南自り徙る者は之を人居と謂ふ。巫覡は之を師と謂ふ。里中公事は之を風俗と謂ふ。私奴は之を土奴と謂ふ。

【釈語】

・面…行政単位

【現代語訳】面(면)を社(사)と言う。民(민)を郷徒(향도)と言う。郷族(향족)を品官(품관)と言う。南より移ってきた者を人居(인거)と言う。巫覡を師(스승)と言う。里中の公事を風俗(풍속)と言う。私奴(사노)を土奴(토노)と言う。

【解説】正文中に出た語彙について、いくつかは小倉進平博士により注釈のなされているものがあるのでこ

で先行研究として紹介する。

- ・社…「行政區畫の面に當るものを社といふ意味である」(小倉一九二七・二二五)。
- ・郷徒…「今日一村内の組合の如きもので、主として人の死亡に際し、葬式の用具の調達し輿をかつぐことを目的としたものに嚮^{ムカフ}豆といふものがある。それに當るものであらう」(小倉一九二七・二二五)。
- ・品官…「今日品官といふ語は行はれて居らぬが、土班のことを意味するものであらう」(小倉一九二七・二二五)。(品官)とは一般には、九品以内の階級にある役人を指した。
- ・入居…「入居は『向化胡人、入居内地者、自祖宗朝有之、盖來者勿拒之意也』(芝峰類說)など、もと北方より移住せる者にも適用した例はあるが、後には南方より徙り來つた者に限定せられたやうに見える。但し今日は入居といはずして『入北』といふ。咸鏡道以南の地方より移住して來たことを意味するのである。舊家になると、『入北十五代』、『入北二十代』など可なりの代數を経たものもある」(小倉一九二七・二二五)。
- ・師…「『師』の訓を^{ムカフ}といふ。今日咸鏡道方言では^{ムカフ}と^{ムカフ}とは同一であるという地方もあり、全然別物であるといふ地方もあつて一致しない。併し多くの地方に於て^{ムカフ}なるものの存することを認めて居る。」(小倉一九二七・二二五)。
- ・風俗…「今日里中の公事を風俗といふことがない。一村が郷徒(郷徒の條參照…原注)より成ることあり、それらが多少行事を異にすることもあるから、風俗などの語を生んだものであらう」(小倉一九二七・二六)。
- ・土奴…「今日は『土婢』などと稱して居る」(小倉一九二七・二六)。

(九)

【正文】親騎衛、無論品官公私賤、能騎射中格者入選。自備軍服鞍馬、每月二巡、自所居邑定將領試射、報兵營賞罰。毎年冬都試居首者、出身。

【和訓】親騎衛は品官公私賤を論する無く、能く騎射し中格する者を選せしむ。軍服鞍馬を備へし自り毎月二巡し、居す所の邑自り將領を定めて、射を試しせし、兵營に賞罰を報ず。毎年冬の都試にて首に居る者、出身す。

【釈語】

・親騎衛…一六八四(肅宗一〇)年に国境警備のため咸鏡道に設置された騎馬部隊。咸鏡道出身者のうち弓才、馬才、勇力なる者六〇〇名を選抜して親騎衛とした。選抜は北兵使に属している一〇の邑から三百名、南兵使に属している六つの邑から一五〇名、咸興以南の六邑は監司下に一五〇名を初選して六百名の騎兵隊を置いた。一〇名ごとに火兵一名、保直一名をおいた。さらに、保人と馬、軍装を支給した。選抜対象者は業武、幼学、閑良、品官、儒林、校生、軍官、驛吏、平民、雑色等ほとんどの階層を対象としており、年齢は二〇歳以上四〇歳以下の者と規定された。

・都試…中央においては兵曹と訓練都監の堂上官、地方においては觀察使と各鎮營の兵馬節度使が、毎年春と秋に武士を選抜する制度。

・出身…科挙試験の合格者。

【現代語訳】親騎衛は品官かどうかや、公私の身分の高下は問わず、騎射に優れ合格した者を選ぶ。軍服と鞍馬が整ってから、毎月二日、居住する邑から將領(指導者、統率者)を決め、射撃の技量を試し、兵營にその優劣を報告する。毎年冬の都試(科挙)で首位の者を騎衛として合格させる。

(二〇)

【正文】邑軍官謂之衛軍官。以品官子弟爲之。額多寡視邑大小。每二人入番。馬兵謂之別武士。亦分番輪直、以久次或取材、陞旗牌官陞知穀官旗鼓官。守堞軍、毋論儒武常賤。凡年十三以上者皆入籍。謂之城丁軍。每歲兵使巡操聚待、各持炬棒擺立城堞、行夜操。四門各置將領、謂之雉總。

【和訓】邑軍の官は之を衛軍官と謂ふ。品官の子弟を以て之に爲つ。額の多寡は邑の大小を視る。毎二人入番す。馬兵は之を別武士と謂ふ。亦た分番輪直し、久次或ひは取材を以て、旗牌官に陞し、知穀官旗鼓官に陞す。守堞の軍は、儒武常賤を論ぜず。凡そ年十三以上の者は皆入籍す。之を城丁軍と謂ふ。毎歳兵使の巡操し聚待し、各炬棒を持ち城堞に擺立し、夜操を行ふ。四門に各將領を置き、之を雉總と謂ふ。

【釈語】

- ・額…定員。
- ・別武士…朝鮮時代の中央軍の総称である五衛營のうち、訓練都監(首都の警備や兵士の養成等を担当した部署)、禁衛營(兵曹判書の直屬軍として首都防衛のために設置された部隊)、御營廳(首都防衛のために設置された部隊)に所属した馬兵を指す。弓をよく使いこなし、戦時には最前線で戦ったとされる。
- ・次…軍隊が宿營すること。
- ・久…時間の長さがどのぐらいであるか。「久次」で「どのぐらいの期間宿營したか」となる。
- ・取材…人材を取る。
- ・旗牌官…李朝において訓練都監に所属している武官職のうち、様々な軍營に置かれた軍官職であり、軍旗に関する任務を引き受けた。二〇人を定員とし、そのうち一名は壮勇衛、二名は武芸別監から拔擢し、残りは兵卒の中から試験的に選抜して在職期間六百日が過ぎれば六品官に昇格させ、他の部署に転出させた。
- ・知穀官…一五九四(宣祖二七)年に訓練都監が設置されて最初に置かれた軍官職と考えられる。本来は弓を使用する射手の訓練を担当した特別な職であったが、後に各軍營の最上級軍官として下級軍事実務を担当した。両班の子弟が主に任用されたが、一般的な兵士が昇格した旗牌官(上述)の中から選抜任用されることもあった。
- ・兵使…兵馬節度使の通称。各地方の軍隊を統率した従二品の武官職。
- ・堞…物見の垣。

・雉總…城壁。

【現代語訳】 邑の軍官を衛軍官と言う。品官の子弟をこれに当てる。額（衛軍官になれる者の人数。「額」は「名額」だろう）の多い少ないは邑の大小による。二人で一組である。馬兵は別武士というが、彼らもまた組に分かれて順番に当直する。兵役期間の長さや、人材の抜擢によって、旗牌官に昇進させ、知穀官旗鼓官に昇進させる。堞（城壁）を守る軍は、儒者武士常民賤民を問わず、およそ十三歳以上の者は皆入籍しなければならぬ。これを城丁軍と言う。毎歳兵馬節度使が巡操するときには集まって待機し、各々炬棒（松明）を持ち城壁に並び立ち、夜の巡回を行う。四門にはそれぞれ將領を置くが、これを雉總と呼ぶ。

(十二)

【正文】 正兵五人。分番立待于官門、以供官役。一曰都訓導、一曰旅帥。一隊正一軍士内奴五人立番、以傳官令。名曰陪牌。

【和訓】 正兵は五人なり。分番にて立ちて官門に待し、以て官役に供す。一は都訓導と曰ひ、一は旅帥と曰ふ。一隊の正一軍士の内奴五人立番し、以て官令を傳（傳）ふ。名づけて陪牌と曰ふ。

【釈語】

・都訓導…通訳ならびに事務担当の中級官人。

・陪牌…「所謂陪牌者、自遼東、團鍊使抄軍士十名、使捍衛防不虞者也。臣等所率驍從之外、只此而已。（所謂陪牌とは、遼東の團鍊より使の軍士十名を抄し不虞を捍衛し防せしむ者なり。臣等の率いる所の驍從の外は、只だ此れのみ）」（『朝鮮王朝實錄』睿宗五卷一年五月一四日）。「驍從」とは貴族あるいは官吏の行列に騎馬でつき従う者のこと。つまり、騎馬の侍従以外の護衛のことを言う。

・内奴…内舎の奴婢を言う。

【現代語訳】 正兵は五人である。組に分かれて立ち、官門で待機し、官役に供する。一人を都訓導と言い、一

人を旅帥と言う。一隊の正一軍士は、内奴五人を立番させ、官令を伝える。これを陪牌と言う。

(一二)

【正文】 男丁別有籍。無無役之人。毎月三聚點于本社。生死告官、移來去告官。越境往來者、告官受牒。

【和訓】 男丁は別に籍有り。無役の人無し。毎月三、本社に聚まり點し、生死は官に告ぐ。移、來、去は官に告ぐ。境を越へて往來する者は官に告げ牒を受く。

【釈語】

・男丁…賦課対象の男子。

・牒…公文書、証明書。

【現代語訳】 賦課対象年齢の男子は特別に籍が有る（この箇所不明。既に籍があるのとは別に壮丁用の戸籍があるのか、あるいは、壮丁専用の籍があるのか）。役を賦課されない者はいない。毎月三日、社稷（土地神のやしろ）に集めて点検し、生死や移動を官に報告する。境域を越えて往來する者は官に報告して証明書を受ける。

(一三)

【正文】 六鎮地、皆北際豆滿江。列置把守官。皆兼衛將號。以戎服囊韃見上官。每月氷合。月一鍊兵。至三月氷解乃止。

【和訓】 六鎮の地は皆豆滿江に北際す。把守官を列置す。皆衛將の號を兼ねる。戎服囊韃を以て上官に見ゆ。毎十月に氷合す。月に一たび鍊兵す。三月に至り氷解すれば乃ち止む。

【釈語】

・把守…看守、守衛の意。

・戎服…軍服。

・囊鞬…弓袋と矢袋。

・氷合…川や湖が氷に閉ざされ結氷する意。冰封。李白「夜坐吟」に「冬夜夜寒覺夜長、沉吟久坐坐北堂。冰合井泉月入閨、金釭青凝照悲啼。(冬夜、夜寒く夜の長きを覺ゆ、沉吟して久しく坐し、北堂に坐す。井泉氷合すれば月は閨に入り、金釭青く凝り悲啼を照す。)」とする例あり。

【現代語訳】六鎮の地は全て北側を豆滿江に接しているため見張りの役人を列置する。彼らは皆衛將の称号を持つ。軍服を着用し弓袋と矢袋を携えて上官に謁見する。毎年十月に豆滿江が氷結すると月に一度訓練を行う。三月になって氷が解けたら訓練はやめる。

(一四)

【正文】把守設於江邊要害處、十里相望。置草屋一間以蔽風雨。將一人軍二人。以正兵爲之。亦五日而遞。三月氷解則撤其半。移設於海防。謂之海望。

【和訓】把守は江邊要害の處に設け、十里を相望す。草屋一間を置き以て風雨を蔽う。將一人、軍二人。正兵を以て之に爲つ。亦た五日にして遞る。三月に氷解すれば則ち其の半ばを撤し、移して海防を設く。之を海望と謂ふ。

【釈語】

・海防…海からの侵入を未然に防ぎ被害を防止する意。

・海望…海寇の侵入を偵察するために沿岸展望の要所となる山頂に設置した望樓。「烽火海望、係是軍情緊急重事、如有虛疎、嚴加考察、不輕定體(烽火と海望は軍情の緊急重事たり。如し虚疎あらば厳しく考察を加え定體を輕んぜざれ)。」(『朝鮮王朝實錄』太宗實錄八年)

【現代語訳】見張りは豆滿江沿いの要所に設け、向こう十里を見渡す。草ぶき屋一間を置いて風雨をしのがせ

る。將一人、兵士二人である。正兵をこれとする。五日ごとに交代する。三月に氷が解ければ半分を撤収させて海防のほうにまわす。この要所の設備を海望と言う。

(二五)

【正文】北路設歩撥。三十里而遞。每番撥將一人。以品官爲之。撥軍五名以戸役論定。五日而遞。

【和訓】北路に歩撥を設く。三十里にして遞^{かわ}る。每番の撥は將一人。品官を以て之に爲^あつ。撥軍五名、戸役を以て論定す。五日にして遞^{かわ}る。

【釈語】

・北路…「吉州乃北路巨鎮（吉州すなはち北路の巨鎮なり）」「永興乃北路重地、屢經非人、殘敗已極。すなはち北路の重地なるに、屢^{しばしば}人に非ざるを経て、殘敗已に極まれり／現代語訳…永興は北路の重点であるのに適任者が治めないので大変に荒廃している」（『朝鮮王朝実録』光海君即位年）のようにある。

・歩撥…宣祖三十年（一五九七）に設置された「擺撥制度」の一。徒歩で公文書を伝える職務を引き受けた人。

・品官…品官郷吏の意。朝鮮初期には三品堂上官以下では郷里出身者を任命したが、後には地方の土官（平安道、咸鏡道の府、牧、都護府にそれぞれ置いた官職で地元の人だけで担当させる）のみを任命した。

・撥…重要な公文書を送送すること。

・戸役…各世帯ごとに課せられる夫役（公の勞務）。

【現代語訳】北路に歩撥制度を設置している。三十里ごとに人員が交代する。撥の各担当者は將一人であるが、これには品官を当てた。撥軍（文書を送送する品官）五名で世帯毎の勞務である戸役に相当するものとし、五日ごとに交代する。

(一六)

【正文】江邊烽臺、監官一人武士三人。以新郷爲之。ト直一名毎、五日而遞。午時燃柴以烟氣相準。雨雪或雲暗。則馳告于前臺。

【和訓】江邊の烽臺は監官一人武士三人なり。新郷を以て之に爲つ。ト直一名毎、五日にして遞る。午時に柴を燃し、烟氣を以て相準とす。雨雪或ひは雲暗なれば則ち馳せて前臺に告ぐ。

【釈語】

・新郷…「盈徳故家大族皆南人。所謂新郷、則自稱爲西人者也。近來則西人用事於學宮、與舊郷、自相傾軋矣。(盈徳の故家、大族は皆南人なり。所謂新郷とは、則ち自稱西人と爲す者なり。近來は則ち西人の學宮に於て用事すれば、舊郷と自ずと相ひ傾軋す。)(『朝鮮王朝實錄』英祖六五卷、二三年六月一日)のようにある。つまり、「新郷」とは、南人(党派の一、西人に対する処遇をめぐり東人が分裂してできた一派であり、西人に対しては穩健派。強硬派の北人と対立。一六二三年仁祖反正時に西人と協力して政權を担ったが一七世紀後半に至り西人と対立した)の一族出身でありながら自ら西人(朝鮮時代における党派の一、沈義謙を中心に士林派が分裂してできた党派であり、金孝元を中心とする東人と対立した。一六二三年仁祖反正によって政權の座に就いた。一七世紀後半に前述の南人と激しい派閥闘争を繰り広げ、同世紀末に老論と少論に分裂した)であると称する者である。

・ト直…「外方書院、雖有所屬、或自本官、折給若干奴婢、以供守直。郷校則自有世傳奴婢、郷所則只有一二使喚、號爲ト直、本官隨便定給。(外方の書院は所屬有りと雖へども、或ひは本官より若干の奴婢を折給し、以て守直に供す。郷校は則ち自ら世傳の奴婢有らば、郷所は則ち只だ一二の使喚有るのみにして、號してト直と爲す。本官は便に隨ひ定給す。)(『朝鮮王朝實錄』仁祖一四卷、四年八月四日)とあり、郷所の下僕をト直と呼び、官の都合に応じて招集し軍政に参与させることができたと考えられる。

【現代語訳】豆満江一帯の烽台は、監督官一人、武官三人で警護を行うが、新郷の者をこれに当てた。ト直(郷

所の下僕) 一名、五日毎に、交代する。正午に点火し煙で互いに標準とした。雨天降雪、あるいは曇りで見通しが良くない場合は急いで前台に報告を行う。

(二七)

【正文】馬兵無保人。自備戰馬。只除撥番、其自備甲冑者、盡蠲戸役。

【和訓】馬兵は保人無く、自ら戰馬を備ゆ。只だ撥番を除き其れ甲冑を自備する者は盡く戸役を蠲す。

【釈語】

・保人…奉足、軍保ともいう。正軍の補助者として上番(出役)した兵士の旅費を負担、もしくはその家の事または農作業を手伝う代わりに自分は軍に出ない壮丁。

・撥番…步撥として徴収されたかわりに税および賦役を免除された者。(二五)の釈語「步撥」を参照。

・蠲…免除する。

【現代語訳】馬兵は旅費や装備、家の仕事を肩代わりしてくれる保人を持たず、みずから戰馬を備えなければならぬ。撥番以外で甲冑を自備する者はすべて戸役を免除する。

(二八)

【正文】俗、尚騎射少業文。男子十餘歲、便操弓馳馬。

【和訓】俗、騎射を尚び業文は少し。男子十餘歲にして、便ち弓を操り馬を馳す。

【釈語】

・俗…世間の風俗、風潮。

・業文…文学を業とすること。嶺南の役弊について次のような記述がある。「嶺南之弊有六、曰役弊、賦弊、糴弊、海弊、山弊、蔘弊也。其役弊、則昔在祖宗朝、有以騎歩兵、登科致仕」〔位〕崇顯者。紀綱漸壞、

人不安分、稍有産業、百計行賂、或托校案、或屬軍官及私募正軍、所爬惟是傭丐殘獨、故昨充而今逃。其所掠弊、莫如戶布、而此若終不可行、則其冒稱幼學、忠義及濫屬校院軍校之類、竝爲查括、歲納一疋布、以復舊法。而分其業文、業武、別設名號而稱之、每年講射、各取優等一人減布、若有連三次連五次優等者、則別加賞格、以示特異於軍保。」(和訳…嶺南の弊には六種有る、曰く役弊、賦弊、糴弊、海弊、山弊、蔘弊である。祖宗朝時には騎兵や歩兵出身として登試に合格し、高い位に着いた者もいたが、規律が徐々に崩れ身分を保持することができなくなると、あらゆる方法を動員し賄賂を使つて郷校の幼生、軍官や私兵として所屬をかたり軍役を免れようとした結果、軍役を担当させるべく捕まえられた者はごろつきや無頼、だけとなつてしまい、結果すぐに逃亡してしまふ。この弊害を正す方法として、幼學(官職についていない在野の學者、ソソビ)や忠義(忠佐衛所屬の軍士)、郷校、書院、軍校に濫属する者を調査して、布一疋を歲納させるという旧法を復活させるべき。そして業文と業武に分類した後、毎年試講と試射を行い各分野で一人ずつ優等者を選び布役を減免して支給し続け、三度や五度にわたつて優等を獲得した者には、個別に賞を加え軍保において特異であることを示すべき。)(『朝鮮王朝實錄』正祖四九卷、二二年一〇月一二日)

【現代語訳】 当地の風潮は、騎射を重視し、文学を業とする者少ない。男子は十余歳で弓を操り馬を乗りこなすようになる。

(一九)

【正文】 兒出腹。即納水盆以洗血。謂之去胎熱。

【和訓】 兒、腹より出づ。即ち水盆に納め以て血を洗ふ。之を胎熱を去ると謂ふ。

【現代語訳】 子どもが生まれるとすぐに水盆に入れて血を洗ふ。これを胎熱をとると言つ。

(二〇)

【正文】人多美髻。沐以稷泔以養髮。故國中用北髻。

【和訓】人美髻多し。沐するに稷泔を以てし、以て髮を養ふ。故に國中の北髻を用ゆるなり。

【釈語】

・稷…穀物の一、高粱。

・泔…米の研ぎ汁。稷泔とは高粱の研ぎ水。

・髻…かもじ。少ない髪にそえ足して横に伸ばす髪。

【現代語訳】美髪の人間が多い。高粱のとき汁で沐浴することで髪を養生するからである。このようなわけで、国中で北方産の髻かもじを用いるのである。

(二一)

【正文】人死四日成服、即葬。不擇山不卜日。百日即除服、或行冠婚。惟儒生品官畧用喪葬之禮。行三年之制。

【和訓】人死すれば四日成服して即ち葬る。山を擇ばず日を卜さず。百日にして即ち除服し、或ひは冠婚を行ふ。惟だ儒生品官のみは畧ほほ喪葬の禮を用ゆ。三年の制を行ふ。

【釈語】

・成服…遺族がそれぞれ規定された喪服を着ること。

・除服…忌明け。服喪期が終わって喪服を脱ぐこと。

【現代語訳】人が死ぬと四日間喪服を着て喪に服すがその後はすぐに遺体を葬る。(埋葬するために) 山を選んだり日にちを占ったりということはない。死後百日経てば喪が明け、冠婚を行うこともある。ただ、儒生や官吏はおよそ「禮記」に定める喪葬の礼を行う。三年の喪に服するのである。

【解釈】

儒教では親を亡くした時に三年の喪に服することが礼として定められている。「子曰。父在觀其志。父沒觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣。」(子曰く、父在せば其の志を觀、父没すれば其の行を觀る。三年父の道を改むること無きは、孝と謂ふ可し)(『論語』学而)。

(一一)

【正文】 山僧多在家。挾妻食肉。子孫繼襲爲僧。

【和訓】 山僧は在家の多し。妻を挾し肉食す。子孫は繼襲して僧と爲る。

【現代語訳】 山僧には在家の者が多く、妻帯し肉食する。子孫が繼襲して僧となる。

(一二)

【正文】 禁用錢。以布縣爲貨。路無不舗店。行旅齋糧而炊。不用盤纏。自南而北自北而南者。皆受公文於官。以譏非常。

【和訓】 錢を用ひるを禁じ、布縣を以て貨と爲す。路には店を舗せざる無く、行旅は糧を齋して炊く。盤纏を用いず。南より北し、北より南する者は皆公文を官於り受く。以て常に非ざるを譏す。

【釈語】

・店…旅舎。当時の「店」とは一般に宿舎と厩だけを提供して、食物については客の持ち込みにより各自調理を行うものであったらしいことが、『旧本老乞大(元刊本)』の記述等からも知ることができる。

・盤纏…旅費。「旧本老乞大(元刊本)」にも用例あり。『老朴集覽』の「朴通事集覽上」に次のようにある。「道中様々なことに使うもの、「質問」に云う、盤費(路銀)にまわり供給される物、例えば衣服や食料を供給される際に金銀財帛の類を使用することは現在では「盤纏」二字により説明される。語源未詳」。

・譏…誰何して調べることを。

【現代語訳】 北方では錢を用いることを禁止されている。布帛が貨幣の代わりになる。路には店がびっしりと並び、旅行は糧食を携えて自ら炊く。旅費は用いない。南より北、北より南に行く者はすべて官より公文書の発行を受ける。これによって普通でない旅行者を誰何するのである。

(二四)

【正文】 地苦寒多風。土瘠穀貴。地廣人少。村無百斛之富、專仰官糶。計口受糧。罕食粟飯、以稷耳麥爲糜粥。猶強力健歩。

【和訓】 地は苦く寒く風多し。土は瘠せ穀は貴し。地は廣く人少し。村には百斛の富無く、専ら官糶^{てふ}を仰ぐ。口を計りて糧を受く。粟飯を食すは罕れ。稷、耳麥を以て糜粥^{びじく}と爲すも猶ほ強力にして健歩なり。

【釈語】

・苦…摩耗が激しい、使いすぎてぼろぼろである。

・官糶…役所(官)が民に貸与する米穀。役所の倉庫にある米穀は通常、その半分を春に民に貸与するが收穫の後に一割の利子を付けて取り立てた。『朝鮮王朝實錄』(中宗二五卷 一年五月二九日)に咸鏡道の官糶ならびに採銀について以下のような記載がある。「端川採銀、爲補軍資也。然其買銀者、必駄載綿布而歸、民出官糶、以買其布、若然則寧以縣布、輸入於其地以買穀也、不必採銀。今赴京之人、多齎銀兩。中原人每稱銀之品好者曰、端川銀、幸復貢銀、則其害豈可勝言。臣意以爲不當採也。上曰、非不知此弊、但咸鏡道軍資不足故欲採銀買穀耳。領事申用漑曰、採銀買穀、以補軍資、不獲已也。但挾銀入中原事、不可勝禁、恐有後弊。(端川では銀の採掘は軍資を補充するためのものです。しかるに銀を売る者は必ず綿布を持って帰り、民は官糶を見据えて其の布を売る、もしそうであるならむしろ綿布よりもその地に穀物を入れるほうがよく、そうすれば銀を採掘する必要がなくなる。今中国に行く者がたくさん銀を携えて行く。中国人の銀

の善し悪しを見る人は端川銀が貢銀であることを喜ぶので、其の害（端川の銀が持ち出されることの被害）は敢えて言う必要があるでしょうか。臣は採らせるべきではないと考えます。上曰く、その弊を知らぬわけではないが、咸鏡道には軍資が不足しており、故に採銀をして穀耳を買い入れることが必要だ。領事申用漚曰く、銀を採掘して穀物を買入れ軍資を補うことは仕方のないことです。しかし銀を中国に入れることをことごとく禁ずることはできず、後弊が懸念されます。」

・斛…古代の体積の単位。一斛は一〇斗（約一八〇リットル）。

・耳麥…귀리。燕麥。

・糜粥…薄い粥。

【現代語訳】土地は摩耗してぼろぼろであり気候は寒く風が吹く事が多い。土は瘠せており穀物は大変貴重である。地は広く、人が少い。村には百斛（石）の富すら無く、専ら官により貸し出される穀物を当てにしている。一家の人数を数えてその数によって糧を受け取る。粟飯を食することは空であり、高粱、燕麥をうすい粥にしたものを食べる。それでも力が強く健歩である。

(二五)

【正文】地多風。俗好氈笠。品官子弟皆着之。兵帥邑宰亦用。竹織如氈笠形。在途戴之以御風。

【和訓】地は風多く、俗には氈笠を好む。品官の子弟皆之を着る。兵帥邑宰も亦た用ふ。竹織にして氈笠の如き形なり。途に在りては之を戴し以て風を御す。

【釈語】

・氈笠…毛で織った笠。当時、朝鮮では氈は中国からの輸入品であつたためこれを輸入することで、当時銭荒にあつた本国の銅が流出することを洪良浩が上陳したことは上述した通りである。

【現代語訳】地は風が吹くことが多く、人々は氈笠（毛織物のかぶりもの）を好む。品官の子弟は皆これを着

用している。兵帥邑宰もまたこれを用いている。竹を織つて甍笠形のように加工して、外にいるときはこれがかぶり風よけとする。

(二六)

【正文】 邑無塵肆野無虛市。人各以有無相易。故物無定價。

【和訓】 邑に塵肆てんし無く野に虚市無し。人は各有無を以て相ひ易ふ。故に物に定價無し。

【語釈】

塵肆…みせ、商店の意。

虚市…市いちの意。

【現代語訳】 邑には商店が無く野には虚市が無い。人はみなそれぞれの持つているものと持つていないものを交換する。したがって物には定價というものがない。

(二七)

【正文】 屋制皆一字重楹、中設複壁。或室或堂、厩、庫皆具。無曲阿連廊、瓦屋皆設風簷。無瓦者、編茅累重、隔以泥土、以禦風。挈山峒或用大石以代瓦。剝大木立烟筒、高過於甍。以防火災。無垣牆繚以籬。織柵或編柳爲之。不設門扉。

【和訓】 屋制は皆な一字に楹を重ね、中に複壁を設く。或ひは室或ひは堂、厩庫皆な具ふ。曲阿、連廊無く、瓦屋は皆風簷を設く。瓦無きは、茅を編みて累重し、泥土を以て隔つるに、以て風を禦ぐ。山峒を挈し或は大石を用ひて以て瓦に代ふ。大木を剝り烟筒を立て、高きこと甍に過ぐ。以て火災を防ぐ。垣牆無く繚を以て籬とし、柵を織りて或は柳を編みて之と爲す。門扉を設けず

【釈語】

・屋制…たてもの、たてもののつくりのこと。

・楹…柱

・宇…庇

【現代語訳】建物のつくりは皆な一枚の庇を天井として何本かの柱で支えたものである。中には仕切りが数枚あつて、居室と厩舎を仕切る。まがりくねった長屋はない。瓦ぶきの家は皆風簷（風よけのひさし）を設けている。瓦の無い家は茅を編んで幾重にも重ねて、上から泥土を塗る。掣山峒或ひは大石を用ひ以て代瓦として風を防ぐ。大木をえぐつて烟筒として立てる。葺（屋根の頂上部分）よりも高くして、火災を防ぐ。垣（壁）のない仕切りには、竹垣を挿すか柳を編んだもので隣家との仕切りとする。門扉は設けない。

(二八)

【正文】門曰鳥喇、山峰曰嶂、高阜曰德。邊涯曰域、墻壁曰築、淺灘曰膝。猫曰虎様、貫牛曰輪道里、烏網曰彈挾。戸曰生契、南曰前、北曰後。

【和訓】門は鳥喇と曰ひ、山峰は嶂と曰ひ、高阜は德と曰ふ。邊涯は域と曰ひ、墻壁は築と曰ひ、淺灘は膝と曰ふ。猫は虎様と曰ひ、貫牛は輪道里と曰ひ、烏網は彈挾と曰ふ。戸は生契と曰ひ、南は前と曰ひ、北は後と曰ふ。

【現代語訳】門（문）は鳥喇（오래）と言ひ、山峰（산봉）は嶂（장）と言ひ、高阜（고부）は德（덕）と言ふ。邊涯（변애）は域（역）と言ひ、墻壁（장벽）は築（축, 투）と言ひ、淺灘（천탄）は膝（골）と言ふ。猫（묘）は虎様（고애, 고냉이, 호양）と言ひ、貫牛（세우）は輪道里（수두리）と言ひ、烏網（조망）は彈挾（탄）と言ふ。戸（호）は生契（생계）と曰言ひ、南（남）は前（앞）と言ひ、北（북）は後（뒤）と言ふ。

【解釈】

・鳥喇…「門の字訓を古くから오래といつて居る。鳥喇はそれに宛てたものである。但し咸鏡道の多くの地方では오래は(一) 近隣の村、(二) 屋敷、(三) 一門親族等の意味に使用せられて居る。」(小倉一九二七…二六)

・嶂…「嶂」は字音を以てよむものであらう。吾人は此の文字を用いた適當な山名を発見することが出来ぬが、會寧附近では給料のなだらかな高みの上に急に聳え立つた峰などあるを嶂と稱するといふことを聞いた。

(二九)

【正文】牛馬不飼粟、放牧于野。公私無屠、故畜蕃息。凡田宅交易用牛馬。

【和訓】牛馬は粟を飼はず、野に放牧す。公も私も屠ることなし。故に畜蕃息す。凡そ田宅の交易は牛馬を用ふ。

【釈語】

・蕃息…盛んに繁殖すること。

【現代語訳】牛馬には飼料として粟を与えず、野に放牧する。官も民もこれを屠殺することをしないので、家畜は盛んに繁殖する。土地家屋の交易にはだいたい牛馬が用いられる。

(三〇)

【正文】任載用車。故牛無鞅轡。車制輪小輻疎。轂用燃火以代炬。

【和訓】任載するに車を用ひる。故に牛の鞅轡無し。車制は輪小さく輻疎なり。轂は燃火を用ひ以て炬に代ふ。

【釈語】

・任載…荷物を載せること。

・鞅…牛鞅。牛が荷物をひく時、首につける道具。

・轡…したぐら。鞍の下に敷くもの。

・車制…車のつくり

・轂…牛車などの車輪の中央にあつて、輻(や)が差し込んであるもの。

【現代語訳】荷物を運ぶには車を用いるので牛に鞍や首ひもがついていない。車のつくりは車輪が小さく間隔も広い。轂は火を燃やす際に用い、たいまつのかわりにする。

(三二)

【正文】小車名曰跋高。無輪様兩木如弓。後有横輓以受物。輕疾勝車。尤利雪上。如風帆行水。

【和訓】小車は名づけて跋高と曰ふ。輪無く兩木を様むること弓の如し。後に横輓有りて以て物を受く。軽く疾きこと車に勝れり。尤も雪上に利あり。風帆の水を行くが如し。

【現代語訳】小車はここでは跋高と名付けて言う。車輪は無く、二本の木を弓のように曲げる。後方に横輓があり、それで物を受ける。軽やかで疾いという点では車よりもすぐれている。雪の上で威力を発揮する。風を受けてふくらんだ帆が水の上を行くかのようなうだ。

【解説】小倉一九二九・九七において、「跋高」を咸鏡北道では발기、발기と言い、平安南北道の大部分の地域では발子と言う旨の記述がある。また、以下のような記述がある。「발子は橈を意味する。『譯語類解』(金敬俊、康熙二九年)に「柁黎발외、似車而無輪」とあり、「課程日録」(著者年代不明)に「柁黎발외」とある「柁黎」・「발외」等の語に當るもので、漢語又は滿洲語に出でたるものであらう。此の橈は平安北道並びに咸鏡道の雪深き奥地に最も多く行はれるもので、積雪又は結氷等により自動車の運轉も中止する如き場合には、唯一無二の交通運輸機關と變ずるのである。奥地にありては夏期猶ほ物資の運搬に此の機を盛んに利用しつゝある有様である。随つて此の語の分布は多くは奥地に濃厚に、鐵道沿線に近づくに従つて稀薄となる。名稱の如きも平壤・中和・黃州地方ではもはや발子といはずして소달子지といふ。」(小倉一九二九・九七―九八)なお、「朴通事

集覽上」(『老朴集覽』収)に「小車 一輪車也」とあるのは、現在の中国での「小車(手押し車)」と同義と考えられる。

(三二)

【正文】犁縛有舌無扇。鋤大如鍤而柄長。不耨細草。

【和訓】犁縛は舌有りて扇無し。鋤は大なること鍤すきの如くして柄長し。細草を耨くさぎらず。

【釈語】

・犁縛…この語不明。牛につけて雑草を取る道具か。「犁」は牛馬に引かせ田畑を耕す道具。「縛」には①古代の楽器②古代の農具、鋤の二つの意味があるが、②のほうか。訳文では「牛に曳かせる縛(すき)」とした。同様に、「舌」および「扇」も不明。

・鋤…すき。手足の力を利用して土を掘り起こす道具。

・鍤…すき。本義は土を掘る道具。土にさしこみ耕す道具(鋤)。

・耨…くさぎる。雑草を刈り取る。

【現代語訳】牛に曳かせる縛すきは舌(詳細不明)はあるが扇(詳細不明)がない。鋤はたいへんに大きく鍤のよう
うで更に柄が長い。小さい草を刈り取るのに使わない。

(三三)

【正文】地宜麻。織細布。無絛臬不蠶桑。衣袴用狗皮。襪用牛革長沒脛。名曰多路岐。不着鞋屣。

【和訓】地は麻に宜し。細布に織る。絛臬無く蠶桑せず。衣袴は狗皮を用ふ。襪べつは牛革を用ひ長きこと脛を没す。
名づけて多路岐と曰ふ。鞋屣を着せず。

【釈語】

・細布…『大漢和辞典』（諸橋轍次著、大修館書店）では糸の細い布、最近の辞典、例えば『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂処編、大修館書店）では「綿平織布」とある。ここでは前後より（麻の）平織り布を指すと考えられる。

・縣…綿の異体字。

・泉…からむし。

・蠶桑…蠶は蚕（かいこ）。養蚕と桑の植樹。

・襪…足袋。

・鞋…先のとがった革または布製の履物。短靴。長靴は靴（騎馬民族の履いた革製の乗馬靴）という。

・扉…古人が草、麻、革などで作ったはきもの。ぞうり。

【現代語訳】地は麻を植えるのに適す。産しこれを細布に織るに適している。綿や苧麻（カラムシ）は産せず、また養蚕殖桑をすることもない。衣袴（いこ）（上下の服）には犬の皮を用いる。足袋は牛革を用い、脛をすっぽり覆ってしまうほど長い。これを多路岐と名付ける。革靴や草で編んだはきものは着用しない。

(三四)

【正文】木惟檣橡榆柳。柳多赤。無松栢。屋材皆用橡。窓牖皆用檣。

【和訓】木は惟だ檣橡榆柳のみ。柳は赤多し。松栢無し。屋材は皆橡を用ひる。窓牖は皆檣を用ひる。

【釈語】

・檣…ヒサギ、ヒサカケ。楸とも。ノウゼンカズラ科の落葉高木。昔、棺を作る材料とした。

・橡…トチ。『朝鮮王朝実録』（太宗二卷一年一二二〇日）に、国が米を輸送するための海運路を作る為に造船を行い、民が飢えて橡実を食料としたとする記述（又國家因下道之米陸轉之難、欲令海運、以林整爲都體

察使、監督造船、飢民畏之如虎、或以橡實爲糧。) がある。

・榆…ニレ。

・柳…ヤナギ。「多赤」の記述から、マルバヤナギ (別名アカメヤナギ) と考えられる。

・松…マツ。

・栢…「栢」の異体字。カヤ、カシワ、ハク。

・窓牖…まど。「牖」は壁にうがつた窓。

【現代語訳】 木は檣^{ヒサカ}、橡^{ヒナ}、榆^{ニレ}、柳のみが見られる。柳はほとんどがアカメヤナギである。松、栢は見られない。建材としてはすべて橡を用いる。窓枠にはすべて檣を用いる。

(三五)

【正文】 海棠實曰悦口。 苡仁曰馬房。 橡實曰栗。

【和訓】 海棠實は悦口と曰ふ。 苡仁は馬房と曰ふ。 橡實は栗と曰ふ。

【釈語】

・海棠實…海棠はバラ科リング属なので実は食用にできる。和語では一名長崎りんご、かいどうなしと言われる。

・苡仁…オニバスの実。苡頭、苡仁實とも言う。

・橡實…トチノミか。(「枋」(国字) および「枋」(国字) の正字体は「橡」である。)

【現代語訳】 海棠の実のことを悦口と言う。オニバスの実のことを馬房と言う。橡の実を栗と言う。

【解説】 いずれも食用にされる果実である。

「悦口」について、小倉一九二九…九八に、咸鏡北道方言において열기、열子のようだが、平安南北道ではこの語は使用されていない旨の記述がある。

「馬房」について、小倉一九二九・九七に咸鏡北道では말방기、平安南北道では마이(厚昌)、마람(江界)、마름(寧邊・博川・安州・肅川・平壤・順川・中和)、마괘이(義州・龍岩浦・宣川・定州・龜城)のように言うとの記述がある。

「橡實」は現代語では도토리、もしくは상토리 열매と言う。「栗」は現代語では밤であるが、小倉一九二七・二八によると「咸鏡地方には栗は頗る稀であつて、實物及び名稱を知らぬ者も多く、橡の實を一般に밤と稱して居る。而して栗の實を特別に明瞭に言ひ表はそうとするには참밤なる名稱を以て呼ぶのである。」とのことである。

(三六)

【正文】 菓惟酸梨榛。花惟杜鵑。江邊多海棠。瓣大如芍藥。實大如杏。香氣郁烈。野池或有蓮菱。藥惟五味子。文廟社稷祭享。果用海棠實。棗栗之代或用白糖赤豆。無漆無靛。間有紫芝。紅藍可染。

【和訓】 菓は惟だ酸梨、榛のみ。花は惟だ杜鵑のみ。江邊に海棠多し。瓣は大なること芍藥の如く。實は大なること杏の如し。香氣郁烈たり。野池に或ひは蓮、菱有り。藥は惟だ五味子のみ。文廟と社稷の祭享に果は海棠實を用ふ。棗栗の代として或ひは白糖と赤豆を用ひる。漆無く靛無し。間に紫芝有り紅、藍とも染む可し。

【釈語】

- ・酸梨…梨の一種。
- ・杜鵑…ツツジ科植物の総称。
- ・五味子…チヨウセンゴミシ。モクレン科蔓性の常緑植物。果実を強壯剤にする。
- ・文廟…孔子廟。
- ・社稷…李朝時代、国王が国民のために祭った土地の神(社)と穀物の神(稷)。
- ・祭享…祭祀する。

・白糖…①白砂糖、②白い飴、の意があるが、棗の代わりなので白い飴のほうが。

・赤豆…紅豆とも。アズキ。

・靛…濃藍色の染料。

・紫芝…マンネンタケ。靈芝とも言う。

【現代語訳】 果実は惟だ酸梨と榛^{はしばみ}のみである。花といえはツツジしかない。江辺には海棠がたくさんある。花弁の大きいことといったら芍薬のようである。実は杏ほども大きい。強い香りがある。あるいは池には蓮^{はす}や菱^{ひび}があるかもしれない。葉といったらた五味子があるのみだ。孔子廟と社稷の祭祀に供え物の果物には海棠の実を用いる。棗と栗の代りに、白い飴とアズキを用いる。漆は無くて靛も無い。間に紫芝があり、紅藍ともに染めることができる。

(三七)

【正文】 穀宜黍稷粟秫大小麥耳牟。早霜不種秋麴。無水田少種稻。麴用稷釀用秫。故村無沽酒。官用火酒。

【和訓】 穀は黍、稷、粟、秫、大小の麥耳、牟に宜しからん。早霜なれば秋麴を種かず。水田無く少^{まれ}に稻を種く。麴は稷を用ひ、釀には秫を用ふ。故に村に沽酒無し。官は火酒を用ふ。

【釈語】

・穀…穀物。

・黍…キビ。

・稷…高粱。

・粟…アワ。

・秫…高粱。特に粘り気のあるものについていう。多くは焼酎を作るのに用いる。

・麥耳…燕麦。

・牟…小麦。

・麴…大麦。

・麴…こうじ。

・沽酒…店売りの酒。

・火酒…アルコール分の強い酒。

【現代語訳】穀物として黍、稷、粟、粘り気のある高粱の大小、燕麦、大麦を育てるのに適している。早霜が来るので秋に大麦の種付けはしない。水田が無いので稲は少ししか撒かない。麴には普通の高梁を用いて、酒を醸すには粘り気のある高粱を用いる。そのようなわけで村には買って来た酒はない。官ではアルコール度の高い酒を用いる。

(三八)

【正文】土不産楮。紙用耳麥擣成。名曰黃麻紙。公私文書皆用之。

【和訓】土は楮を産せず。紙は耳麥の稈を用ひ擣成す。名づけて黄麻紙と曰ふ。公私の文書は皆な之を用ふ。

【釈語】

・楮…一般に紙の原料となる木。こうぞ。

・擣…たたく、搗く。

【現代語訳】楮が育たないので、紙はエンバクの茎を使い擣いて作る。なづけて黄麻紙と言う。公私の文書には全てこれを用いる。

【解説】通常中国で「黄麻紙」と呼ばれるものには「黄麻(ジュート、シナノキ科)」が原料に用いられている。「耳麥」は燕麦(イネ科)なので、この「黄麻紙」も本来の「黄麻紙」ではなく、方言語彙かと考えられる。麦や稲の茎(藁)を原料として作られる紙は日本語では「わら半紙」という名称があり、北塞では祖末な「わら半

紙」のことを、過去に中国の皇帝からの聖詔が書かれていた黄麻紙にかけて「黄麻紙(황마지)」と呼んでいたのかもしれない。

(三九)

【正文】 土不産蠟。燭用麻榦蓬莖。塗以稷糠以燃火。名曰燈。

【和訓】 土は蠟を産せず。燭には麻榦蓬莖を用ふ。塗るに稷糠を以て、以て火を燃す。名づけて燈と曰ふ。

【釈語】

・蠟…広義には、ウルシ科のハゼノキ(櫨)やウルシの果実を蒸して果肉や種子に含まれる融点の高い脂肪を圧搾することとして抽出したものを指す。ここでは実のなる木(ハゼ、ウルシ)のことを指すか。

・燭…ともしび。

・蓬…よもぎ。

・稷糠…糠は糠に同じ。高粱の外皮(ぬか)の意か。

【現代語訳】 土地には蠟の原料となるハゼ、ウルシが生育しない。明りには麻や蓬の莖を用いる。灯心に高粱の糠を塗って固めて火を燃やす。これを燈と言う。

(四〇)

【正文】 土不産苴。油用麻子汙。以調羹炙。

【和訓】 土は苴^{えこま}を産せず。油は麻子汙^{あつもの}を用ふ。以て羹を調へ炙る。

【釈語】

・苴…えこま。

・羹…肉に野菜を混ぜて作ったスープ。

・麻子汁…字義通りには麻の実を絞ったもの。現在の亜麻仁油に相当するか。

【現代語訳】土地には荏が生育しないので、油は麻汁を用いる。これで汁や炙りものの味をととのえる。

(四一)

【正文】慶興赤池多。鯽魚長或二尺餘。一邑皆網取食之不盡。造山浦產秀魚黃魚。

【和訓】慶興は赤池多し。鯽魚は長きこと或ひは二尺餘なり。一邑、皆網で取りて之を食ひても盡きず。造山浦は秀魚黄魚を産す。

【釈語】

・赤池…地名か。「赤く濁った池」という意味か。ここでは仮に後者の意味で訳す。

・鯽魚…フナ。

・秀魚…ボラ。

・黄魚…ニベ(グチ、イシモチ)の類。

・造山浦…地名か。

【現代語訳】慶興には赤く濁った池が多い。鯽魚は長いもので二尺余りにもなる。一つの邑で皆網を持つて取って食べても尽きる事がない。造山浦では秀魚や黄魚がとれる。

(四二)

【正文】豆滿江產松魚。每四月風和始出。巨口鱗極細。鰓有四。似松江之鱸。名曰松魚。其以是歟。夏有魚似秀魚而小。俗名夜來。秋產鯉魚。長數尺。連隊汧流而上。一網或得數十。

【和訓】豆滿江は松魚を産す。每四月に風が和めば始めて出ず。巨口にして鱗は極めて細なり。鰓は四有り。松江の鱸に似る。名づけて松魚と曰ふ。其れ是の以か。夏に魚の秀魚に似て小なる有り。俗に夜來と名づく。

秋は鯉魚を産す。長さ數尺なり。隊を連れ沍流して上る。一網にして或ひは數十を得る。

【釈語】

・松魚…マス。

・鯉魚…ハクレン。

【現代語訳】 豆滿江はマスがとれる。四月に風がやわらいでからやつと出てくる。口がおおきく、鱗はたいへん小さい。鰓が四つある。松江の鱸と似ている。名を松魚と言うが、それは松江の鱸に似ているからであろうか。夏は秀魚に似た小さい魚がとれる。世間では夜来と名づけている。秋はハクレンがとれる。長さが數尺もある。群れになって川をさかのぼるので、一網で數十匹をつかまえることができる。

(四三)

【正文】 豆滿江禁行船。海口有漁船。皆用全木聯合爲底。剗木如槽。爲左右板。彼中所謂^ナ尙也。此駕海往來南關。堅緻。罕具載。

【和訓】 豆滿江は行船を禁ず。海口に漁船有り。て皆全木を用ひ、聯合して底と爲す。木を剗^えること槽の如くし、左右の板と爲す。彼れ所謂^ナ尙に中るなり。此海に駕して南關を往來す。堅緻にして罕に具載す。

【釈語】

ナ尙…ナ尙船(마상선、マサン船)。麻尙船とも。巨木をくりぬいて船としたものと解説されるが、實際には平板な板を切り出すための製材の技術的な問題により、ノコギリで木を曳くかわりに巨木を縦に割ったものを薄くくりぬいたものを並べることで板状にし、それを船の左右の壁とし、船底を広げるために丸太を組んだものを船底にした平底船(竜骨の無い船)の意と思われる。この船では、荷物の積載は一般に行わなかったことは、『朝鮮王朝實錄』(明宗一〇卷五年二月二六日)の記述からも明らかである。(穀物を慶尙道から咸鏡道まで輸送する手段としてマサン船で輸送するには積載量が少なく日数もかかりすぎるし、大船を新造しても沈没の

危険は避けられず、許多の国穀が沈没すれば辺疆の民だけではなく三道の民にも弊害を及ぼすので、穀物ではなく綿布を送ることで軍資を備える旨の議論。原文…移穀實邊、雖是美意、自慶尙至于咸鏡、海路險惡、漕運甚艱。若以丁尙船輪轉、則容載數少、雖止萬石、數月之内、未易畢輸。若用新造大船、則遇風濤卒起、必致撞碎。許多國穀、若致敗沒、非徒惠不及邊民、只使三道之人、受弊而已。今考戶曹本道留穀之數、不至竭乏、請(之)姑停移粟之議、但多送縣布、隨歲豐歉、減價買穀、以備軍資。

【現代語訳】豆滿江では船の運航が禁じられている。海口には漁船があるが、これは丸太を繋いで船底としたものである。巨木を槽のようにくりぬいて左右の板としていて、いわゆる丁尙(マサン)船である。北の人々はこれに乗って海路を下って南関に至る。マサン船は堅牢緻密であるが、荷物を積載することはほとんどない。

(四四)

【正文】捕青魚吞魚以網、無泰魚以釣、文魚以叉、淡菜海蔘以鉤。

【和訓】青魚吞魚を捕ふには網を以てし、無泰魚は釣を以てし、文魚は叉を以てし、淡菜海蔘は鉤を以てす。

【釈語】

・青魚…セイギヨ、ニンシン

・吞魚…大口魚の意か。タラ。

・無泰魚…不詳。李根雨二〇一〇では『新增東國輿地勝覽』(一五三〇)には咸鏡道明川の物産条に無泰魚が見える。明川はほかでもなく最初に明太が取れた場所として伝わっているところである。また、黄道淵の『方藥合編』(二八八四)では、「明太は明川からとれるさかなであり、無泰魚ともいう」と記録している。しかし、『輿地圖書』(二七六五)では、明川の無泰魚と吉州の明太魚を併記しており、無泰魚が明太と同じ魚であるか確かではない」としている。

・文魚…ミズダコ

・淡菜…怡貝の干したものか。

・海蔘…ナマコ

【現代語訳】 ニシンやタラを捕らえるには網を用い、無泰魚（明太魚か。詳細不明）は釣で、ミズダコは叉（さ）すまた、先端が分かれて又（また）になったもの）で、怡貝やナマコは鉤を用いる。

(四五)

【正文】 昆布海藋生於海中暗嶼。惟明川地方及慶興之西水羅串有之。每三四月採。乗船中流。灑魚膏於水面。則洞見水底。乃以長木掇取。兵營先採之。其次地方官。其次鎮將。

【和訓】 昆布海藋は海中の暗嶼に生ず。惟だ明川地方及び慶興の西水羅串にのみ之れ有り。每三四月に採る。船に乗りて中流し、魚膏を水面に灑げば則ち水底を洞見す。乃はち長木を以て掇ひ取る。兵營先に之を採り、其の次に地方官、其の次に鎮將なり。

【釈語】

・海藋…ワカメのことか。

・魚膏…海藻を採取する際、朝鮮半島では以前は魚の内臓の腐らせたものを海の表面に撒く事で海面を落ち着かせ、海底がよく見渡せるようにしたという。

・長木…伝統的な海藻漁に用いられる。

・兵營…朝鮮時代、各軍の軍司令官が駐屯した陸軍基地。

【現代語訳】 コンブ、ワカメは海中の暗嶼に生ず。明川地方及び慶興の西水羅串にのみ生息する。毎年三四月に漁を行う。船に乗ってゆき、魚膏を水面にまけば水底がよくみえるようになるので、長木ですくい取る。兵營が先に捕り、次に地方官、次に鎮將が採る。

【解説】 朝鮮半島北部での伝統的な昆布、ワカメ漁の様子を記録したもので、「魚膏」「長木」など前世紀前半までの朝鮮半島では行われていたいくつかの技法も散見する。

(四六)

【正文】 龍鬚産於明川鏡城海中。一莖直生長數尺。細如筋、堅如骨。北人用插筆管。謂之龍鞭筆。李白詩云、莫捲龍鬚席。遼史云、高麗貢龍鬚草席。蓋織此爲席也。

【和訓】 龍鬚は明川鏡城の海中に産す。一莖は直生し長さ數尺なり。細きこと筋の如く、堅きこと骨の如し。北人は插筆管に用ふ。之を龍鞭筆と謂ふ。李白の詩に云く、龍鬚席を捲く莫かれ。遼史に云ふ。高麗は龍鬚草席を貢ぐ。蓋し此を織りて席と爲すならん。

【釈語】

・龍鬚…コヒゲイ、コヒゲともいう。イ草科の多年草。

【現代語訳】 龍鬚は明川鏡城海中に産す。莖は直生し長さは數尺になる。筋のように細く、骨のように硬い。北人は筆を挿す管として用いた。これを龍鞭筆といった。李白の詩に曰く「龍鬚席を捲く莫かれ」。遼史に次のように言う。「高麗は龍鬚草席を貢ぐ」というのは、思うに、これを織って筵をつくるのであろう」

(四七)

【正文】 鹿茸毎五月獵取、七月進獻。惟茂山多産而良。

【和訓】 鹿茸は毎五月に獵取し、七月に進獻す。惟だ茂山のみ多く産し良し。

【現代語訳】 鹿茸は毎年五月に採取し、七月に献上する。茂山が多く産し品も良い。

(四八)

【正文】鐵鹽。北關諸邑皆用鐵盆、煮海水成鹵。其法鐵盆受水數石用。木槽盛水注于盆。火煎一晝夜、得鹽十餘斗。色黔味濁。不如土鹽白而清。惟不畏濕。鐵盆重一千五百斤。用兩跋高載、十牛曳之云。

【和訓】鐵鹽。北關諸邑は皆鐵盆を用ゆ。海水を煮て鹵を成す。其法は水數石を受けたる鐵盆を用ゆ。木槽に水を盛り盆に注ぐ。火にて煎すること一晝夜、鹽十餘斗を得る。色黔く味濁る。土鹽の白にして清なるに如かず。惟だ濕を畏れざるのみ。鐵盆は重きこと一千五百斤なり。兩跋高を用ひて載せ、十牛にて之を曳くとも云ふ。

【釈語】

・鯉魚…ハクレン。

・斤…尺貫法で一斤＝一六兩＝約六〇〇グラム。鉄鍋は一千五百斤は約二四〇〇キロか。

・跋高…正文 (三一) を参照。

【現代語訳】鉄塩について。北関諸邑は皆岩塩ではなく鉄鍋を用い、海水を煮て鹵(塩の異体字)を成す。その製法とは、水数石を入るぐらいの鉄鍋を使う。木槽に入れた水を鉄鍋に注ぎ、火で一昼夜煮詰めることで塩十餘斗を得ることができる。色は黒みを帯びていて味も濁っている。とても岩塩の白くて澄んでいる状態には及ばない。ただ、湿気には強い。鉄鍋は大変重く二四〇〇キロもあり、二台のそりを用いて載せ、牛一〇匹でこれを曳くとも言っていることである。

(四九)

【正文】沙鐵出於會寧鍾城。磁器產於明川會寧。北地無強鐵。但以沙鐵作釜鼎。農器更用破器鍛成。斧鎌之屬鈹利。無減強鐵。與南土異。

【和訓】沙鐵は會寧鍾城に出づ。磁器は明川會寧に産す。北地は強鐵無し。但し沙鐵を以て釜鼎を作る。農器

は破器を更用し鍛成す。斧鎌の屬は鋭利なり。強鐵を減らすこと無し。南土と異なれり。

【現代語訳】沙鉄は會寧鍾城で産出する。磁器は明川會寧に産する。北地には強鉄が無いが、沙鉄で釜鼎を作ることができる。農器は壊れた鉄器をもういちど使つて鍛えて作る。斧鎌といったぐいは鋭利であるが、強鉄を減らすことのないのが、南方とは異なっている。

(五〇)

【正文】西水羅海中有島。水鳥皆入棲。遺卵於草間大如拳。色或白或青或黄或斑斕。漁人得之剖食。其殼可盃。故名曰卵島。

【和訓】西水羅海中に島有り。水鳥皆な入りて棲む。卵を草間に遺し大なること拳の如し。色は或ひは白く或ひは青く或ひは黄にして或ひは斑斕なり。漁人之を得て剖食す。其の殼は盃にするも可なり。故に名づけて卵島と曰ふ。

【現代語訳】西水羅海中に島があり、水鳥が皆そこに入り込んで棲んでいる。水鳥は卵を草間に生み、その大きさは拳ほどもある。色はあるものは白く、あるものは青く、あるものは黄色く、あるものは斑である。漁師はこれを捕つて食べる。その殼は盃にもできる。このようなわけで、島の名前を卵島と言う。

(五一)

【正文】每五六月水漲時清人人各騎一おの尙舟流下豆江。使通事問情。則謂往瑟海煮鹽採藿云。

【和訓】每五六月水の漲る時、清人、人各おの尙舟に騎りて豆江を流れ下る。通事をして情を問わしめば、則ち瑟海に往きて鹽を煮て藿を採ると云ひて謂く。

【釈語】

・瑟海・朝鮮語で세해。「瑟」は「大きな琴」の意味であり、海岸線の形を「大きな琴」と見立てて北塞近辺

の海をそう呼んだと考えられる。清人が豆満江から流れ着いたということなので、おそらく河口周辺を瑟海と呼んだのであろう。具体的な場所等詳細については今後の課題である。

【現代語訳】 毎年五六月、水の漲る頃に、清人（中国人）が一人各一艘のマサン舟に乗って豆満江を流れ下ってくる。通訳に事情を尋ねさせたところ、瑟海に往き塩を煮、ワカメを採っているということである。

（孔州風土記 了）

参考文献

- 李根雨（二〇一〇）『韓国明太漁業始末』（神奈川大学 国際シンポジウム報告書Ⅰ）一七三—一八〇。
 小倉進平（一九二四）『新羅語と慶尚北道方言』大阪…大阪東洋學會。
 小倉進平（一九二七）『咸鏡南北道の方言』京城…朝鮮語研究會。
 小倉進平（一九二九）『平安南北道の方言』京城…京城帝國大學。
 小倉進平（一九三〇）『咸鏡南道及び黃海道方言』京城…京城帝國大學。
 京都大学文学部東洋史研究室編（一九六一、一九六七改定増補）『改定増補東洋史辞典』東京…東京創元社。

〔追記〕

前回『熊本学園大学 文学・言語学論集』第二十一卷第二号に掲載した「『北塞記畧』訳注（一）孔州風土記」に誤りがありましたので、訂正いたします。字句の誤りを訂正したものについては特に傍線にてこれを示しました。

（一）【現代語訳】 摩天嶺は端川と吉州の間に盤據し、咸鏡南道と咸鏡北道の分岐点である。摩天嶺の南側を南關と言ひ、北方を北關と言ふ。

（三）【和訓】 鏡城以北之を六鎮と謂ふ。六邑は分かれて豆満江邊に列す。曰く會寧、鍾城、茂山、穩城、慶源、慶興なり。

（四）【和訓】 慶興、古の孔州の地。昔、人の掘りて銅印を得る有り。而して文に「匡州防禦使印」と曰ふ。故に

一號を匡州と云う。初めて慶源府を孔州に設ける。世宗十年、會叱家の地に移治するも、以て孔州の古地と距たり、隔遠にして守り難ければ、復た孔州古城を修す。萬戸を析置し、孔州等の處に僉節制使を兼ねる。十七年傍近の民戸三百を割き之に屬せしめ、孔城縣を置く。僉使を以て縣事を兼ねさしむ。十九年穆祖肇基の地たるを以て、陞せて郡と爲し、慶興と改稱す。二十五年更に其の城を廣げ、陞せて都護府と爲す。【釈語】都護府・高麗および朝鮮李王朝時代に設置された辺境防備のための行政機関。

【五】【解説】四鎮および阿吾地堡、撫夷堡については、例えば成宗實錄二十四年（一四九三）に次の記載がある。「阿吾地距撫夷堡不遠、撫夷之民入保於阿吾地、民多無家可容、故設土宇、以居之。請加築撫夷城、子低微處、仍留防以除其弊。」（阿吾地は撫夷堡から遠からずして、撫夷の民は阿吾地に入保するも、民多くは家の容るべきもの無く、故に土宇を設けて、以て之に居らしむ。請うて撫夷城を加築し、子の低微に處るものは、仍ち留防して以て其の弊を除かんとす。）

【六】【和訓】慶興は山に緣りて城と爲す。城は豆江に臨み、南は滄海に連なる。蓋し我が國の東北の地の盡頭、而して府城の中に居る。四鎮環拱し、碁の布し星の列するが如し。

【七】【正文】孔州極北不毛之地也。三春無花、八月見雪。衣無繡絮、食惟黍粟。而地踔遠人民希。瘠土無積聚、大興中國之上郡北地俗相類。久爲女眞野人之所據、多有被鄙之風。其利樺皮麻布貂貉之皮。【和訓】孔州は極北の不毛の地なり。三春花無く、八月に雪を見る。衣は繡絮無く、食は惟だ黍粟のみ。而して地は踔遠にして人民希れなり。瘠土は積聚^{しゃくぐ}無し、大いに中國の上郡北地の俗と相類す。久しく女眞野人の據する所と爲り、多く被鄙の風有り。其の利は樺皮麻布貂貉の皮なり。【現代語訳】孔州は北の果てにある不毛の地である。春に花が咲くことはなく、秋の初めに雪を見る。着るものに綿は新しいものも古いものも入っていない（このように寒いのに、綿入れなど無い、ということ）。食べるものは黍か粟のみである。はるかに遠い場所にあるので人はほとんどいない。土は瘠せたまま、新しい土が積み重なることはない。中国の上郡北地とよく似ているかもしれない。長いこと女眞野人によって占領されており、たいへん賤しまれているような雰囲気もある。白樺の皮、麻布、貂貉の

皮という天然資源に恵まれている。